

VB経営 虎の巻

先日、「社長交代」について講演した。私はこれまで3度、社長職を後継者にバトンタッチしてきているが、いずれもうまくいったと自負している。講演後、出席者から「後継者選出の決め手は何だったか」と問われた。私の答えはシンプルだ。周囲の納得感。これに尽きる。

後継者へのバトンタッチ

先日は2・47%と再び過去最低を記録したという。

社長交代のタイミングは難しい。特に先行きが不安定だと安心してバトンタッチできないという経営者も多いだろう。しかし、社長交代は現職社長の重要な責務の一つ。うまくいかない

周囲の納得感決め手に

と企業が傾く。自分の年齢を冷静に見つめ、戦略的に実行すべきだ。

非オーナー系企業の場合



インディゴブルー社長 柴田 励司氏

1985年上智大文卒。マニックス2008年カルチュア・コンピュータ・ヒューマン・リソース・ビジネス・クラブ(CCC)コンサルティング(現マーサ)の最高執行責任者(COO)に就任。10年6月から現職。

納得感が生まれるのは、仕上げの肝になる。

その候補者の人間性に帰す。社外から社長を招くとき、あの人とも、この納得感づくりは欠かさない。他社での実績も一緒に働きたいと周囲の多

良いが、それだけでは肌感。周囲にもその認識がある。しかし、これはまず「この人であれば」という気持ちを抱いてもらう必要がある。古参の幹部が目線がどうしても変わってしまつて、2代目になる人は概してこの手のことに敏感だ。仕事がいかに感じ、古くからの幹部を實力に關係なく要職から外したり、腫れ物に触るようには接したくない。父社長との距離感の変化など、当事者でないと分からない胸の内をお聞きした。オナー系の場合、多くが世襲となる。2代目にしてはマイナスイメージだ。創業社長はバトンタッチを継ぐことが選択肢になど心して臨んでほしい。